

JICA 緒方研究所・第三者評価委員会（第12回）概要

1. 日時：2022年8月9日（火）14:00～16:00
2. 場所：JICA 緒方研究所 4階400号会議室、及びオンライン接続
3. 出席者

【委員】 静岡文化芸術大学文化政策学部 下澤 嶽 教授
東京大学公共政策大学院 城山 英明 教授
関西学院大学 西野 桂子 教授
法政大学法学部 弓削 昭子 教授（委員長）

【JICA 緒方研究所関係者】

研究所長 高原 明生、副所長 牧野 耕司、次長 山田 実、各領域長 他

4. 議事概要

開会挨拶の後、弓削委員長による議事進行の下、まずは、JICA 緒方研究所から「2021年度 JICA 緒方研究所活動報告」に基づく説明・報告がなされた。その後、各委員からの質問・コメントと JICA 緒方研究所からの補足説明があり、最後に委員長が総括を行った。概要は以下のとおり。

●コロナ禍が続く中での活動全般について

- ・ コロナ禍の厳しい業務体制においても活発な研究実施と発信に敬意を表する。昨年度の委員会のコメントに真摯に対応された。
- ・ 特に COVID-19 に関する研究立上げはタイムリーかつ実践的な対応と言える。
- ・ 更に、JICA 緒方研究所レポート「今日の人間の安全保障」をはじめとする人間の安全保障に関する継続的な研究成果は大学の授業で活用しており、また、多くの学生が成果物をダウンロードしている。
- ・ コロナ禍や気候変動などにより、人間の安全保障の概念の重要性が増す中で、複合的な脅威について今まで以上に相互連関を意識的に考えることが重要。
- ・ 国際援助潮流に資する学術的な研究・発信を進める目標に関し、今後の活動を通じて国際開発分野でのリード機関となることを期待する。

●研究成果の発信について

- ・ 実用的な成果の発表を高く評価する。対外的なシンポジウムやセミナー等を37回も実施したこと、日英仏での発信等、各所でウェビナーがあふれる中、戦略的な発信計画や発信内容の差別化に真摯に取り組まれたことも評価する。
- ・ 多くの領域でローカライゼーションが流行語になっているが、アジア、アフリカ各々に根差した協力を実施されている印象。これらの地域からの JICA、日本の知見への期待は高いと思われる中、アジアの研究機関間のパートナーシップ、アジアからの発信強化に向けた更なる活動に期待する。
- ・ 動画はタイムリーな発信ツールで、継続的に活用することで実践的かつ効果的な成果発信につながると見込まれる。手作り感が良いが、時間や言語等、対象者に応じた対応

が必要と思われる。授業での活用を想定すると3-5分程度、英語のものに日本語のサブタイトルがあると活用範囲は広がる。

- ・ コロナ前と比して増えた論文、ウェビナー、動画などは、若年層へのアウトリーチ等、成果発信の対象範囲を拡大する効果あり。動画に関しては、途上国の人や現場の様子を具体的に見せることで、より充実した映像になると思う。なお、動画制作においてはバックグラウンドミュージックも重要。
- ・ 多くのウェビナー実施のうち、「JICA COVID-19-日本の経験を共有する」ウェビナー・シリーズに多くの参加者を得たことは興味深い。現場におけるCOVID-19対応、例えば病院のクラスター対応等を紹介する中で、参加者が具体的に何に関心を持ったのか、どのような新しい関心を惹起したのかは重要である。UHCの重要性はこれまでも指摘されてきたが、国内のヘルスケア・システムは変化を遂げ、地域包括ケアや様々な連携の重要性等について議論されるようになってきている。国内で起きていることと国際的議論とのギャップがある中で、このギャップをつなぐ意味でもCOVID-19の経験がよい機会になったこともあり、従来UHCで議論してきたことを超えて、改めて注目された内容があれば聞かせてもらいたい。
- ・ 研究所のアイデンティティ、比較優位を活かしたフラッグシップレポートの発刊は効果的であり、今後の発展に大きく期待する。
- ・ ワーキング・ペーパーの発刊数が減っていることをもう少し深刻に受け止めるべき。ワーキング・ペーパーのアウトプットこそJICA緒方研究所のインフラと言える。この発刊数が年々減り、査読付学術誌での発表に流れている印象を受ける。JICA緒方研究所の意義を改めて議論してもらいたい。設立当初に比して予算規模は増加傾向、研究員も増えている中、JICAらしいアウトプットは何かを改めて検討してもらいたい。
- ・ 成果発信は、昨年度の大きな落ち込みからの回復は評価するが、ワーキング・ペーパー発刊数がコロナ前の20-25本/年に対し12本(2021年度)というのは回復しきれていないとも言える。ポリシー・ノート発刊数も増やしてもらいたい。
- ・ ポリシー・ノートや、リサーチ・ペーパー、ディスカッション・ペーパーへのシフトは、成果発信を迅速化する意図は理解するが、簡単なものを出そうとしているという印象も受ける。アウトプットは多様化するのではなく、絞り込むことがむしろ(JICA緒方研究所の存在意義を示す意味でも)本来的と思われる、媒体間の関係なども含め検討がなされるべき。
- ・ 成果発信状況に関する数値分析に関しては、何が、なぜ、増えた/減ったのか等を、口頭説明のみならず報告書の中に明記するとよい。

《JICA 緒方研究所からの説明》

- ・ ワーキング・ペーパーの発刊数(の伸び悩み)は、コロナの影響が続く中でフィールドワークがままならず、手持ちデータを活用した手法による論文の発刊に頼らざるを得ない、という基本的な状況に変化がなかったことが一つの要因。加えて、人間の安全保障レポートへの取組は初の試みであり、相当程度の労力をかけた側面もある。このような制約下でも積極的に取り組んだことにより、他の媒体発信の増加につながった。
- ・ 学術誌への投稿も積極的に取り組むことを推奨している。JICA 緒方研究所全体の国内

外における知名度や認知度の向上を図る意味でも、「JICA 緒方研究所 研究員」の肩書で様々な場面・媒体で発信することは有意義であり、ワーキング・ペーパーへの積極的な取組と併せて（学術誌投稿などの）他流試合を活用した認知度向上を考えている。

- ・ アジアの研究者との連携については、開かれたインド太平洋（FOIP）に関する研究や人間の安全保障のエンパワメント研究などにおいて取り組んでいる。
- ・ 動画の長さは 3 分程度が適当との指摘はそのとおり。今後は、シンポジウム等での活用や学生の授業への活用も想定して、2-5 分程度で作成することを意識したい。
- ・ COVID-19 ウェビナーは、途上国の喫緊のニーズに沿った最新の知見、経験の発信を通じて日本からの知的貢献を図るもので、技術協力の現地活動が制限される中、オンライン活用による補完も想定したもの。コロナ禍における UHC というよりは、院内感染対策や公衆衛生体制等、コロナ対策そのものが主な内容だった。第 8 回までに寄せられた 720 件ほどのコメントは、①最新の知見に対する質問、②日本における具体的なコロナ対策、③海外の参加者が直面する課題は日本でも同様なのか、④コロナを受けて日本の医療体制はどうなるのか、に分類される。特に、日本の公衆衛生体制・医療体制（保健所の役割、保健師の存在・育成方法）、平時からの健康教育や予防の方法、住民の医療アクセスに関する質問が多かった。

●人間の安全保障、SDGs への取組について

- ・ 人間の安全保障の概念を再考するフラッグシップレポートの創刊は大きな成果と評価する。UNDP との連携、企画部との共同での取組も評価する。
- ・ 人間の安全保障レポートの発刊により、人間の安全保障の概念のバージョン 1.0 から 2.0 への改変を精力的に整理されたことは意義深い。概念の基本は変わらないものの、対象となる脅威が複合的で、かつ拡大している中、それを超える部分に関する議論が更にできるとよい。例えば、人間の安全保障と SDGs の関係は整理の必要があるほか、気候変動が重視される中で出ている Planetary Health、人新世といった自然のセキュリティにも関連する概念は本当に「人間の」安全保障で括れるのか、といった点も議論の余地がある。
- ・ 他方で、人間の安全保障 2.0 における具体的なプロジェクトのイメージが伝わってこない。複合的脅威と具体的なプロジェクトとのつながりを示せるとよい。例えば、インフラ分野の協力は質の高い成長であると同時に、紛争後の平和構築、CO2 排出削減、サービスアクセスの改善等にも寄与する可能性があり、そのインパクトは潜在的にはより広範に及びうる。このような分野横断的な協力を人間の安全保障 2.0 のプロジェクト例として示すとよい。SDGs はゴール番号に関心が行きがちだが、win-win や trade-off といったゴール間の相互作用が興味深い。分野・課題による分類が大切な一方で、分野をつなぐ必要性もあり「人間の安全保障 2.0」や SDGs はそれを表現していると言える。
- ・ SDGs との関係については、領域との関連を整理した表を活動報告上で記載するなど、以前は全面的に推進していたようだが、人間の安全保障へ重点をスライドした印象があり、安定した戦略という点で弱さを感じる。人間の安全保障は重要かつ広範なテーマであり、日本を特徴づけるものであるため、これを重視するのであればむしろ、SDGs

に分散せず人間の安全保障をどう見せるかに集中するのも一つの方針ではないか。

- ・ SDGs の中間点として、ポスト SDGs への提言に資する研究の立ち上げは有効。国際社会のキープレイヤーになることを期待する。
- ・ 人間の安全保障レポートについて、現状は日本語版の発刊のみで限定的と思うが、どのようなフィードバックがあったか聞かせてもらいたい。

《JICA 緒方研究所からの説明》

- ・ 人間の安全保障の取組において、人新生や気候変動への対応、また ODA を活用した共通価値創造（Creating Shared Value）を検討している。例えば、ESG（環境・社会・ガバナンス）投資が世界の大きなうねりになっていることを踏まえて、ODA を活用して先進国中心の取組を途上国とつなぐ等、今後検討していきたい。
- ・ 人間の安全保障の概念と具体的な協力とのつながりは、インパクトのある事例について、発現成果を目立たせるような発信を心がけている。
- ・ 人間の安全保障レポートへの反応の一つとして、経団連からの依頼により企業への説明会に登壇した。昨今の複合的な脅威、ESG やインパクト投資等が叫ばれる状況の中、人間の安全保障に何らかのヒントがあるのではということ、関心が示されたのではないかと考える。他にも、AFP 通信（AFPBB News）と学生団体の共同シンポジウム、各大学等からの発表依頼などもあり、今後も引き続き対応する予定。
- ・ SDGs への取組状況については、JICA として組織的にコミットしていることも踏まえ、研究所としても定点観測をしていく想定。

●取組分野について

- ・ 政治・ガバナンス領域の新設を通じ、国際情勢を踏まえた新たな研究活動を行っていくことは、異なる角度からの国際協力を考える意味で必要と言える。所長による内部向けの講義シリーズも JICA 職員向けの良いイニシアティブである。
- ・ コロナ研究会を研究プロジェクトに発展させて研究成果を広く発信したことは、現在のニーズに応えたものであり、また日本の開発協力の歴史は JICA 緒方研究所の比較優位を示したものの。
- ・ 重要課題に継続的に取り組みつつ、新たな課題に関する新規研究を立ち上げていくのはバランスの取れたアプローチである。
- ・ 中南米、移民研究等、新分野に幅広く取り組んでおり、やるべきこと、新しいことを着実に実施している印象。
- ・ 外国人技能実習制度の外国人材の活用に関する国際協力については、日本国内における発想の転換が必要と感じている。今回の研究で示した「外国人労働者の世界的な争奪戦」という論点を通じて、日本国内の認識が変わるとよいと思う。
- ・ 多文化共生の取組は国内の問題に関与する重要性を示した優良事例であり、国内で国際協力を実施するためのある種のフロンティアと言える。このテーマに足を踏み入れたこと自体がよかったが、2040 年における外国人労働者需要が現在の 4 倍になるという数値を出した上でいかにそれを実現するかを議論するというやり方もよかった。対外的なネットワークを持つ JICA という組織としてのアセットを活かす意味でも新しい

国際協力のパターンと言える。日本の将来に対する重要なインプットとして評価。

- ・ 外国人共生社会というテーマに JICA、JICA 緒方研究所として取り組むことになった背景や、今後の展開の可能性（本来業務として協力する国を増やすのか、新たなモダリティが考えられているのか等）について確認したい。
- ・ 著名な海外機関、国際機関との共同研究や発表、GDN 等との連携も効果的。シナジー効果の更なる発現にも期待する。

《JICA 緒方研究所からの説明》

- ・ 外国人共生社会に関する取組に関し、JICA 所掌の対象範囲検討はご指摘のとおりで、例えば JP-MIRAI（国内事業）は外務省（監督官庁）とも協議しつつ対象範囲を検討して進めている。海外での取組は JICA の本来業務として、インドネシアへの専門家派遣、ベトナムの民間連携等、既存スキームを活用して複数のプロジェクトが動き出している。JICA 緒方研究所としては、インドネシアを対象に国際移動の要因、日本が選定されるために強化が必要な事項等の研究の立上げ準備中。

●JICA 事業へのフィードバックについて

- ・ 研究成果の JICA 事業へのフィードバックについては、第三者評価委員会での発言が 3 年ほど前から増え、活動報告書での説明が拡充されるようになった。事業を担う実施母体（JICA）と共にあることが JICA 緒方研究所の優位性であり、事業へのフィードバックを続けて提示できていることは評価する。
- ・ JICA 事業のフィードバック類型化の図 (P27) はわかりやすい。（フィードバックの一環である）ポリシー・ノート 2 件は増やすべき。ポリシー・ノートに至らずとも、ある種のアウトプットや事業実施に示唆のあるもの、C 類型のフィードバックにつながっているものもある。ポリシー・ノートからアウトカムに至るものもあるが、他のものがベースになることもあり、B 類型を更に整理することも可能ではないか。ポリシー・ノートの枠を更に広く捉える余地もあるのではないか
- ・ 2018 年のポリシー・ノートが今回 C 類型のフィードバックにつながったという「時差」を意識した記載がなされたのはよい。

《JICA 緒方研究所からの説明》

- ・ フィードバックの類型については改めて整理し、掲載方法（書き方）も併せて検討したい。

●実施体制について

- ・ 少ない人材でこれだけの成果を上げたことを高く評価。
- ・ 実施体制強化、研究倫理委員会の整備はよかった。予算が 2021 年度に増加したようだが、その理由如何。

《JICA 緒方研究所からの説明》

- ・ 直近の予算が増えたのは、人員増に加えてコロナ禍で現地調査ができていなかった中で、データ取得のための現地委託調査を積極的に実施したこと等が背景と考えている。

●年間計画と結果分析について

- ・ JICA 緒方研究所の年間計画の策定方法、本委員会の発言・指摘等が次年度計画へどのように反映されているか、数値目標の設定方法について説明いただきたい。
- ・ 年度計画、数値目標を立てて結果をフォローすることが重要。学会や学術誌への発表を JICA の成果としてどのように捉えるかの整理を含め、年度目標とその結果について、本委員会で提示してもらいたい。
- ・ 公的機関としての JICA の役割を踏まえれば、ワーキング・ペーパーのダウンロード数について、伸び率が高かったもの、伸びていないものは何か等の詳細を分析することが重要。
- ・ 2021 年度の対外発信状況をどのように捉えているのか確認したい。
- ・ 第 5 期中期計画目標の数値目標（60 本の成果発信）について、媒体ごとの細分化の有無、各年度の達成状況に関する考え方、第 4 期の業務実績評価指標 3 つと第 5 期の指標（60 本）との関係性、全体像を確認したい。
- ・ 第 4 期の指標のうち「国際機関・政策担当者等への効果的な発信事例」は具体的に何を 20 件とされたのか確認したい。

《JICA 緒方研究所からの説明》

- ・ 年間計画は JICA 全体で毎年度作成しており、当研究所の今後の取組方針も詳細に目標設定している。委員会で受けた示唆は翌年度の計画策定時に反映させている。
- ・ ダウンロード数の分析内訳は可能な範囲で報告書にも明記する。
- ・ 本報告書 P4 に記載の 3 つの指標は第 4 期中期計画期間（2017 年度～2021 年度）のもので、JICA 全体の計画である第 5 期中期計画（2022 年度～）における研究事業に関する指標は 1 つのみとされたことから、媒体ごとの件数ではなく、多様な媒体を含む発信成果の総数（60 本/年）を取り上げた。リサーチ・ペーパー、ディスカッション・ペーパーに加えて学術誌等も重要であり、多様な媒体で発信していくことに意義があると考えた。中期計画以外では、セミナーの参加者数等について具体的な目標を設けているほか、発刊物についても誰がどの媒体の成果を作っているのか見える化して、モニタリングを行っている。
- ・ 第 4 期中期計画指標の効果的な発信事例は、「国際機関・政策担当者等への」を広く捉えて、ハイレベルなもの、オペレーショナルなもの双方を含む、特に効果的と考えられる発信事例をカウントしており、報告書内では★マークを付している。

《JICA 緒方研究所からの説明を受けた委員コメント》

- ・ 数値目標の 60 本/年の内訳がないことは理解した。第 4 期中期目標期間中は 3 つあった指標が、第 5 期中期目標期間においては包括的な指標 1 つに絞られるというのは不安である。年度計画、数値目標を設定した上で、その結果を評価する仕組みが必要と考える。
- ・ かつて JICA が事業仕分けの対象になり、研究所も厳しい目で見られる中で、研究活動の健全化、評価の見える化のために第三者評価委員会が必要とされたと認識している。本委員会では、研究所としての「基本構造」をしっかりと示すこと、つまり JICA の研究

所以外ではできない研究を実施して、数値で示すことが重要と考える。

《JICA 緒方研究所からの説明》

- ・ 問題意識はご指摘のとおり。JICA の中でも第三者の目で評価してもらう委員会があるのは、評価部を除き当研究所のみである。中期計画を前提に対外的に明示する指標は一つとしても、当研究所としては各活動の内容・意義を踏まえて具体的に取り組むことを意識したい。

5. 委員長総括

弓削委員長により、今次委員会の主要論点が以下のとおり整理された。

- ① コロナ禍の影響が続く中、活発に研究活動及び成果発信を行っていることを高く評価する。
- ② 特に人間の安全保障レポート（フラッグシップレポート）の発刊は大きな成果であり、高く評価する。
- ③ JICA 緒方研究所における研究活動と SDGs との関連、人間の安全保障と SDGs の関係性の更なる整理・明確化を期待する。
- ④ 日系人移民、外国人共生社会へ向けた調査研究など、国内課題への取組に着手したことも評価する。
- ⑤ 国際機関との連携において、更なるシナジー効果の発現に期待する。
- ⑥ 研究成果の対外発信は、最適な媒体での発刊が重要であり、年次計画の発刊総数の目標達成に期待する。特に JICA 緒方研究所の発信媒体であるワーキング・ペーパー（今後のリサーチ・ペーパー、ディスカッション・ペーパー）への注力とあわせて、ポリシー・ノートの増刊も強く期待する。動画作成の有効活用も重要である。
- ⑦ 従来の成果指標であるワーキング・ペーパーのダウンロード数に関する詳細分析も必要である。
- ⑧ ポスト SDGs に関する研究活動を戦略的に行い、新たなグローバル枠組みにおけるキープレイヤーになることを期待する。
- ⑨ JICA 緒方研究所の比較優位性を活かして JICA ならではの研究を更に進め、国際援助潮流の形成に資することを期待する。

以上